

言語に直面するマイムが、物語によって引き立つことがほとんどないことを何とか説明しようとするれば、次のように言えるだろう。いきなりぎょっとさせるような、奇跡以上のおもしろいものを出現させることは、作者がいまだ存在しないものを言おうとすることにくらべれば、はるかにやさしい。いまだ存在しないものとは、人にはまだ理解されないもの、理解されないことであって、それがわたしたちのかけがえのない夢の条件や理由になるのである。言語がその本領を発揮する、マイムにはないさまざまな手段については、ちょっとした本が書かれるべきだ。わたしとしては次のように限定してみよう。言葉が言えることは、現在、過去、未来の時を越えるもの。目にみえる場所にはないこと、隠れているものやあまりに遠いもの。現実にはないこと、抽象、総括、要約。その他いろいろなことが言える……。マイムにはこうしたことはできない。なぜなら、<言うこと>、それは単に説明したり、指示したり、喚起したり、推論することではなく、ある約束事としてどの人にも共通の意味を見出す一つの記号(シーニュ)を生み出すことなのである。マイムが生み出すのは、約束事としての記号(シーニュ)に決してならない現在性だけである。もしこのような記号を生み出すとしたらマイムは死んでしまうだろう。つまり人が言語と名づけるジャンルの一種となって、マイムはデッサン、彫刻、絵画、音楽などとの血縁関係を失ってしまうことになるのである。

「マイムの言葉-思考する身体」 エティエンヌ・ドゥクルー 1998年 ブリュッケ
p.170 「おもちゃの兵隊」の解説 - あるいはマイム独自のおもしろさについて 1962年

